

## 『古事記』編纂1300年 大和で考える故里出雲

高校22期 上田 晃

『古事記』という書物には、実は結構、素性の怪しいところがあります。「序」によれば、和銅5年(712)に完成したことになっていますが、奈良時代の正史である『続日本紀』には、それに関する記載が全くありません。編者である太安万侶についても、叙位や没年の記載のみで、史書の編纂に携わったという記事はありません。江戸時代から古事記偽書説が唱えられているほどです。ただ、奈良時代前期まで使われていた上代特殊仮名遣いによって『古事記』が記載されていることからみて、偽書説はあてはまらないと思います。

では、なぜ『古事記』は正史からは無視されてきたのでしょうか。『続日本紀』に記載されている『日本書紀』と比較してみます。『日本書紀』は、天武10年から編纂が開始され、中国の『漢書』や『後漢書』などをモデルとした「正史」であり、天武朝以降、律令国家を形成していく、その事業の一環として、世界帝国＝中国と肩を並べる帝王＝天武までの神話・歴史を語ったものです。したがって、『日本書紀』は当時の世界共通語である漢文体で記載されています。つまり、当時のグローバルスタンダードに基づいた歴史書です。

それに対して、『古事記』には中国への対外的意識はみられません。あくまで、国内向けの書物であり、神話を統一しうる王の宗教的権威を示したものとなっています。また、『古事記』は推古天皇までで、律令国家の「現代史」を語っていないし、漢文ではなく、日本語として表記されています。

『日本書紀』の世界創成神話は、中国と共有する陰陽説の視点から天地開闢が語られ、その神話は「倭」という地域性をこえた世界標準につながっています。それに対して『古事記』ではいきなり「高天原」における神の誕生から始まり、天と地が分かれる以前を語りません。「高天原」は倭にとって固有な神々の世界となっています。

こうした差異以上に大きな違いは、『古事記』に載っていて、『日本書紀』正伝に記載されていない出雲神話は、古事記神話の実に25%を占めていることです。『日本書紀』の構造は、イザナキ・イザナミ神話からスサノオ、岩戸神話、オロチ退治、オオクニの国譲り、天孫降臨、カムヤマトイワレヒコと直接的につながっています。では、どうして出雲神話は『古事記』に必要だったのか、ということです。

そこで、「出雲とは何か」ということです。結論からいえば、古代出雲は大和の王権にとって特別な存在ではなかったかということです。出雲の特殊性は、出雲 - 大和 - 伊勢を結ぶ宗教的な「宇宙軸」を形成していたことにあるのではないかということです。この宇宙軸は、縦軸に「高天原 - 葦原中国 - 黄泉国」で構成され、横軸に「出雲大社 - 大和 - 伊勢神宮」を構成します。そして、伊勢神宮と高天原が直結し、出雲大社と黄泉国が直結しています。出雲大社は、大和にとって西に位置し、日の没するところです。だから、「日隅宮(ひすみのみや)」ともいい、オオクニヌシノカミが「幽冥界」を支配しているのです。

もともと、スサノオ - オオクニによって国づくりがおこなわれてきた「葦原中国」とは、高天原からの神話的命名であり、高天原からみた場合、「葦」の葉のさやぐ世界、つまり荒ぶる神々が棲息し、混沌と無秩序とに覆われた未開の地、宗教的にいえば、聖ならざる、俗なる、醜き世界だったのです。オオクニによって統一された、その葦原中国が国譲り神話と天孫降臨神話によって、大和神話に回収されたのが『古事記』なのです。つまり、アマテラスの子孫たる皇孫が現実界を支配し、オオクニには幽冥界の支配をまかすことで、この縦軸と横軸全体を統治する構造をもつにいたったのではないかと思います。それが、『日本書紀』の段階にいたれば、政治過程として律令国家が完成し、出雲に繋がるよりは、世界帝国中国と連なろうとするグローバリズムが優先するようになったのではないか。それが、「葦原中国」から「豊葦原の水穂国」への転換ではなかったかと思えます。